

手足は拘束され、尻は突き上げた状態で白い壁に空いた丸い穴から突き出ししている。身動きが出来ない状態なので、突き出した尻を引き抜くこともできない。

「ううっ… うああ…」

萌々香は呻き、啜り泣いた。

もう何時間も放置されているように感じた。

実際の所、一時間も経っていないのだが、萌々香には何時間にも思えた。

「助けて… 誰か助けて…」

幼い声だった。

萌々香は城永が察した通り、今まで誰とも付き合ったことがない。

母子家庭で、父親とも話したことがないことが影響していた。

萌々香にはただ啜り泣くことしか出来なかった。

時折、力一杯手足を動かして逃げだそうとするが、手首と足首に激痛が走り止めてしまう。

その後、今度はより一層激しく泣くのがあった。

何度目かの脱出の試みの後、萌々香は体の痛みに悲鳴を上げた。

「ああっ…」

そして顔を床に付けて呻く。

「だめっ、もう駄目…」

萌々香の泣き声が大きくなったとき、それを遙かに超える大きな声で、少女の叫び声が響き渡った。

「嫌っ！ 嫌あ！ 離して！ 嫌ああー！」

萌々香はぐっと息を止めて怯える。

周囲を包んでいるカーテンが大きく揺れた。

カーテンの向こう側に連れてこられた少女がいるのだ。

怖い！ 怖い！ 別の女の子が連れてこられた！？

萌々香はパニックに陥った。

耳を塞ぐことも出来ず、ただ怯えた。

ガシャンッ ガシャンッと音が鳴る。

それは萌々香と同じように自由を奪われた音だった。

音は四度響いた。

手足を拘束されたのだ。

「お願い！ 許して！ やめてーっ」

悲鳴に男の声が被さった。

さっきの声とは違う。もっと年配の声だ。

「もう遅い。尻が穴から突き出てるぞ」

男は、いひひひっ、と笑った。

「やめて！ やめて！」

「よし、カクテルを作るぞ。さあ、こうしてやろう」

ヴィイイン、ヴィイイン、ヴィイイン、

機械音が聞こえてきた。

萌々香はぶるぶると全身を震わせながら、その音を聞く。

歯が震えてがちがちと音が鳴った。

「嫌っ、そこはやめて！ やめて！ お尻はやめてえ！」

少女の叫びがより一層激しくなる。

お尻という言葉に性に疎い萌々香もようやく察した。

隣の子はお尻の穴に何か入れられようとしてるんだ…

しかし察したところで萌々香には何もすることはできない。

「ひいっ！ 痛いっ！ 痛いっ！」

鳴り続ける機械音と少女の叫び。

「うあああっー あああっ、痛いっ、痛いっ、止めてえ！」

男は少女に怒鳴り散らす。

「止めるか。いくらつぎ込んだと思ってるんだ。アナルの血と俺の精液でカクテルを作るからお前が飲め！」

「ぎゃああっ、ぎゃああっ」

激しい抜き差しが始まったのだろう。

少女が堪えきれず絶叫する。

そしてその後は男のペニスの挿入だった。

壁から突き出た尻の二つの穴は客が自由に使えることになっているのだ。

“お客様と一緒にその場で作る新鮮なカクテル”というサービスだった。

勿論、働きに来た少女達は何も知らない。

この部屋に連れてこられ、ようやく悟るのだ。

萌々香は荒い息を吐き、恐怖に震えていたが、やがて白目を剥き、意識を手放した。

隣で起こっている出来事に耐えきれなかったのだ。

あまりの恐怖で失禁し、壁から突き出した尻も尿で汚れてしまう。

萌々香がぐったりとしている横で、隣の少女はペニスを突き入れられ犯され続けた。

初めてアナルにバイブを突き入れられ、出血し、膣には客の男のペニスを挿入されたのだ。

「うああ、ああっ、ああーっ」

少女の濃い化粧も涙でとれてしまい、小麦色の尻には精液がぶちまけられた。

「うう、う…」

この少女もまた絶望のうちに気を失ったのだった。